

特集：ミュンヘン・ハイエンドショー 2017

High End 2017 in Munich 見学レポート

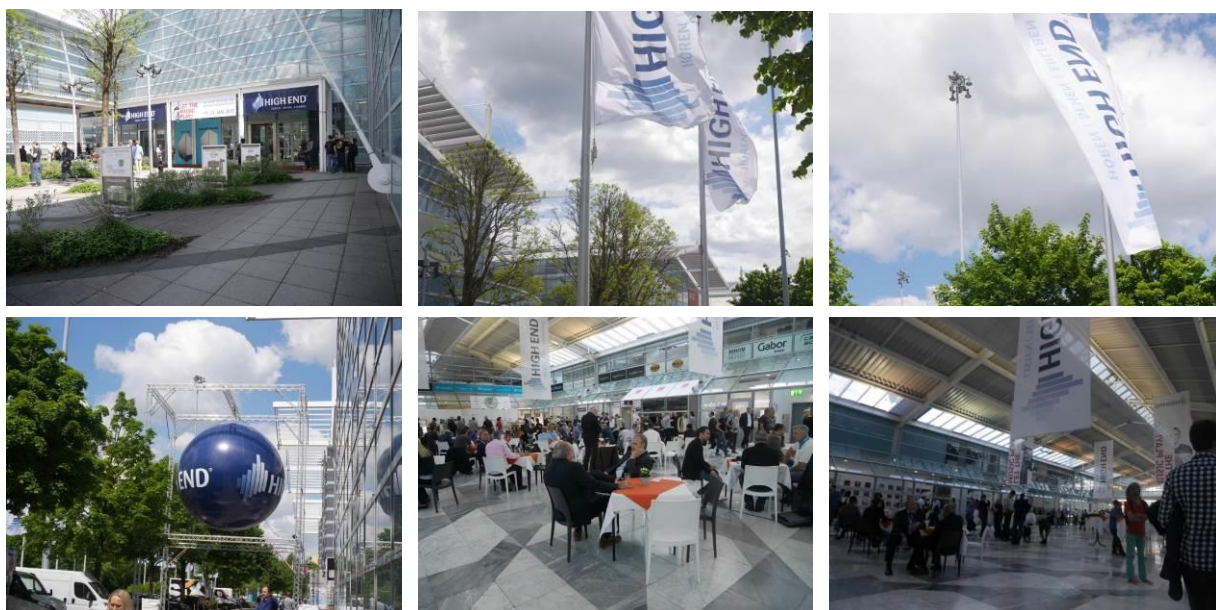
パナソニック㈱ アプライアンス社 ホームエンターテインメント事業部
井谷 哲也

5月18日から21日までミュンヘンで開催された High End 2017 に参加したのでここにレポートする。会場は例年同様に、ミュンヘン市内の中規模の展示会場 MOC (Münchener Order Center) で、普段はアパレル・ファッション関係に使われる事が多いと言う。その為か明るく清潔感のある会場で、所謂“見本市会場”といった殺伐さも無く、センスの良さが漂う雰囲気を持っている。

High End 2017 には同展示会場の1階から3階までが使用され、1階は大きな会場をコマに分割して小規模なブースとして使用。2階3階は、独立した広めの部屋が予めしつらえてあり、2階部分のブース前は広いフリースペースでカフェテリアになっている。地場の大手メーカーは部屋を2つ3つと使用しているところもあって、全体的にゆったりとした展示会である

主催者公式発表によると、総来場者数：21,000人以上(昨年比+10%)。出展社数：44カ国より538社(昨年比+4%)と共に成長を見せ、出展者の国別内わけは、独、米、英、伊、スイス、仏、デンマーク、中、日、蘭の順で、ドイツが全体の40%。ドイツ以外のヨーロッパが40%、アメリカおよびアジアからの出展それぞれ10%と全世界的。CESでのVenetianが少し元気がなくなっているのと対照的な動きを見せている。

去年は例年より1週間早く日本のゴールデンウィークにかかった開催で、多くの日本人の方が見学されていたが、今年は元のスケジュールに戻り、日本人も昨年より少なかった模様だ。

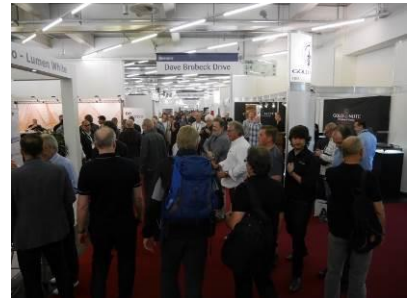


全体印象

昨年に引き続きアナログが堅調で、各社力を入れてきている。特に Pro-Ject 社は、日本市場を意識してかS字アームラインアップを充実。clearaudio 社は高級リニアトラッキングを多数展開。磁気フロートプラッタやトラッキングエラーレスのトーンアームなどの新たな提案も散見された。各社のデモを見ていてもアナログをソースとして使っている例が多数見受けられ、中にはオープンリールを使ったケースも目立ち始めていた。

ヘッドフォン/HP アンプが昨年に引き続き堅調で、中国・韓国系のメーカーの出展が目立ち、また、MQA/Roon などのハイレゾ・ストリーミングに関する新たな動きが少しずつ市場に浸透してきているのを見て取れた。

ショーは毎年木曜日に始まり日曜日まで続く。木曜日は招待日であり、業界関係者・マスコミ関係者が多く、一般のファンの方は土曜日に集中する。会場を見回っていても昨年に比べて、客数が増えた実感があつた。特に初日（招待日）と土曜日に顕著であつたと思う。また、これも感覚的であるが、女性客が増えているようにも見受ける。下の写真は土曜日朝、会場前の様子。開場直前には、エントランス前には大きな行列ができ、朝から熱気に包まれていた。



一階部分は通路が狭く特に土曜日は歩行困難な箇所も。

様々な趣向が凝らされているのもこのショーの特徴で、ミニバンド演奏や、車載メーカーの車展示なども集客に一役買っている。



各社ブース

以降、各社のブースの様子を写真中心にレポートする。なお、お断りしておくが、本レポートは、小職がブース説明員の空き時間を使って巡回したものをまとめたものなので、全てを網羅しておらず、偏ったものになっている事をご了承いただきたい。

■ naim

Mu-so が大ヒットしている naim。

昨年より大きなスペースを使って Focal と共同ブースを構えていた。



Muso の BENTLEY とのコラボバージョン
 繊細な模様の付いた、艶消しアルマイト仕上げ外装、
 刻みの入ったダイヤルが従来モデルとの差別化ポイント。

下は新しいネットワーク関連商品群。



Unity ATOM 40Wx2
 NetworkPlayer -Amp



Unity Star
 NetworkPlayer -Amp CD-ripping

■ DENON/Marantz

欧州で、Marantz といえば Ken Ishiwata 氏が有名だが今回は不参加だった模様。その代わり SA-10/PM-10 の訴求レターを発信されていた。

昨年まではブースの奥に



Marantz の試聴室がしつらえてあり、Ishiwata 氏のデモが人気を呼んでいたが、今年は本格的なシアターに作りかえられて、DENON のマルチチャンネルのデモに使われていた。

■ Pioneer / ONKYO / TEAC

今年から Pioneer は ONKYO /TEAC ブースに統合された。

右の写真は TEAC の一体型オーディオ “New Vintage” WS-A70。

木と布を基調とした北欧調デザインが美しい。



Pioneer 新設計 SA-CD プレーヤ PD-70: 参考出品

TEAC プリメインアンプ NR-7CD

■ Mark Levinson

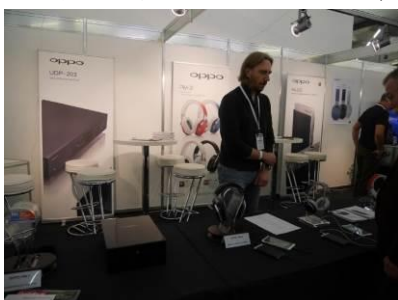
Samsung 傘下になったためか、今までよりは存在感のあるブースを構えていた。



ターンテーブル No515 (中) と、今回新発表のフォノイコ内蔵プリメイン No585.5 (右)

■ OPPO

高音質 BD-Player で国内でも存在感を高めている同社は、新開発の UHD-BD-Player の他に、目下大人気の SONICA-DAC、ヘッドフォン/HP アンプ群を展示。



ヘッドフォン/HP アンプ

New UHD-BDP UDP-205 €1,799

SONICA-DAC

■GIP

High End Show では常連の山形のスピーカーメーカー。Western サウンド復刻を目指したスピーカ群を独自で開発しており、かなり大きな部屋でビンテージサウンドを聴かせていた。人気も高く、毎年大勢の人が聴き入っている。同社鈴木社長によると、特に韓国・中東が今 Western ブームで、555 ドライバのレプリカが 500 台注文が入り大変だったとか。毎年凄く目立っているブースなのだが、何故だか日本のマスコミには取り上げられることが少ない。



■IsoTek

欧州で最近良く見かけるようになったオーディオ用クリーン電源を作っているメーカー。昨年まで気づかなかったのですが、ひょっとすると High End 出展は今年からかも？



■mbl

前回、High End Mässan 2017 見学レポートで、同社を mbI (エム・ビー・アイ) と紹介したが、間違いで正しくは mbl (エム・ビー・エル)。お詫びと共に訂正します。

国内ではなかなか聴けない全方位型スピーカで、独特の音場再現にファンも多く、私も各展示会では試聴を楽しみにしている。ここでの人気も高く、試聴コーナーは常に満員。スピーカの他にも High-End の CD プレーヤー、DAC など展示。



■TAD

今回も平野代表自ら出張されてデモ対応。どこのショーでも高いレベルの試聴室を作られるのはさすがである。ここでも人気は高く常に満員で常に立ち見が。私が訪れた時は丁度 CR1-MK2 をデモ中だったが、ME-1 の人気が高かったと聞く。



■ESOTERIC

Grandioso M1 を 4 台使い B&W800D3 をドライブ。私が聴いた中では今回のショーで最もいい音を聞かせていたと思う。漆を使った Limited Edition も展示。



■Avantgarde

最上位機 TRIO の限定モデル（左）。その前にドラムセットを置いて、ハンブルグのプロドラマー、Oded Kafri のセッションをやっていた模様。残念ながら私が行った時には終了していた。



■Zanden



CES 常連もハイエンドは初参加との事。
MOC では、

Model120(Phono Preamplifier)、310(Line
Premplifier)、8120(Power Amplifier)が展示
されていた。

同時期にマリOTTホテルで開催されてい
た hifideluxe に試聴室が設置されていた模様
で、山田社長は両方の対応で忙しくされてい
た。

■TRIODE

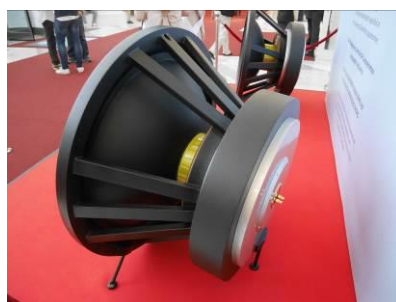
こちらは High End 常連。例年同様に山崎社長が出張対応。いつもの法被姿が見られましたが残念ながら写真に納める事ができませんでした。プリメインアンプ「Luminous 84」やパワーアンプ「TRX-P88S」などを発表。奥の試聴室では、海外限定モデル「MUSASHI」のデモも。



■Volva

ある意味、今回の High End で一番目立っていたのがドイツの Volva Audio。一見、かつて日本のオーディオフェア等で見かけた様な大口徑ウーハユニットに見えるが、実はスピーカ型エンクロージャで中に 3Way システムが内蔵されている。

会場エントランスの目立つ場所にステージを作り、常にコンパニオンを配して試聴室へ誘導していた。



レコードプレーヤ関連

■Pro-Ject

アナログプレーヤメーカーの中では最大規模のブース。豊富なラインアップを展示していたが、今年あらたに加わったのがS字アームの機種群で、1テーブルを設けて5機種をアピール。昨年来場者が多かったこともあり、日本市場向けにアピールしたい意向かも。



■clearaudio

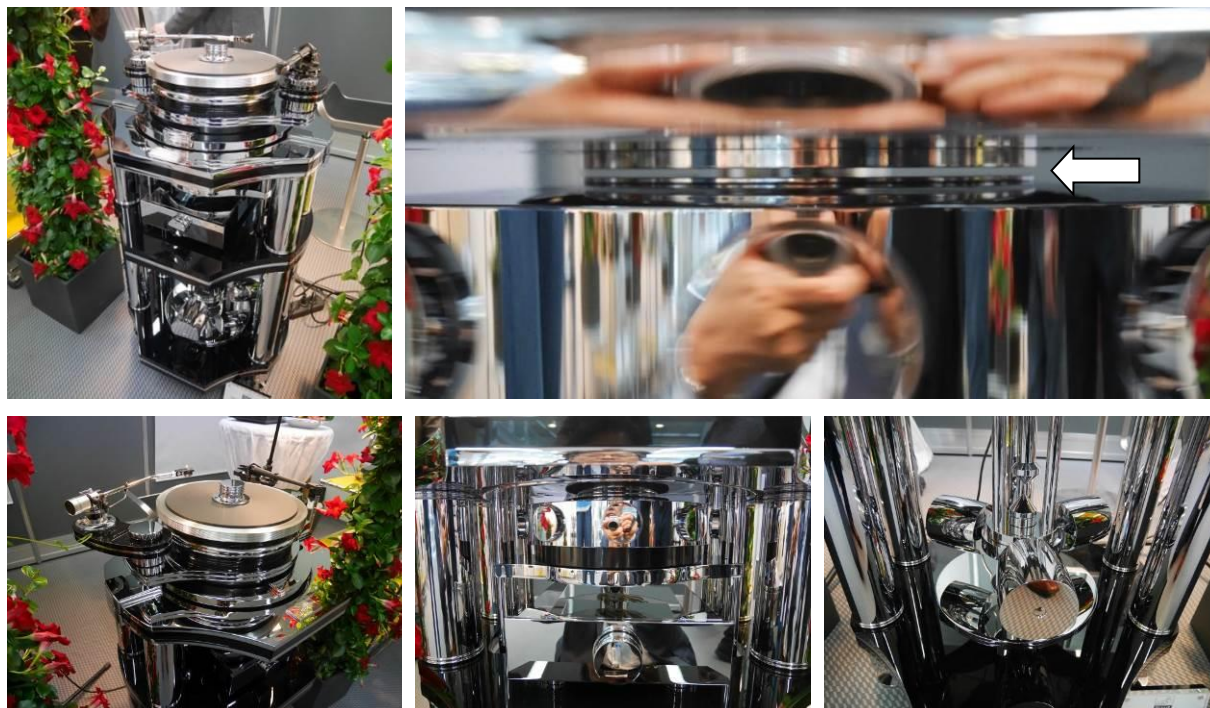
展示規模は Pro-Ject に匹敵。高級機よりでアクセサリ類も豊富に品揃えている。



リニアトラッキングアームを以前から作っていたが、今回ラインアップが増えた。少なくとも4機種はある模様。

■TRANSROTOR

上段右の写真、下がローターでモーターからベルトで駆動を受ける。上がプラッタでよく見ると間にギャップがあるのが分かる（白矢印）。即ち磁気カップリングでモーター振動をプラッタに伝えない構造。高額なベルトドライブでこのような構造をとっているものは多く見かける。



更にプラッタを含むプレーヤ機構全体がフロートされていて、下部のウェイトが重力に引っ張られ常にプラッタの水平が保たれている。

■Acoustic Solid

TRANSROTOR と同様に磁気カップル＋フローティング構造を持つ。Hand Made In Germany を強く訴求。製造ラインの様子もビデオで紹介していた。



■ EMT

老舗の EMT。 地味ながらも存在感のあるブース。一般人にはちょっと敷居が高く入り辛い。



THALES のトーンアーム SYMPLICITY2
ステレオサウンド誌の盾を展示

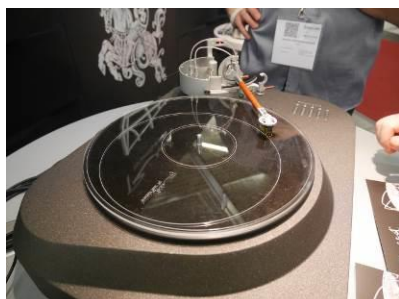


上段 JPA66MK2：バリアブルイコライザー
中段 EMT986：ハードディスクプレーヤー

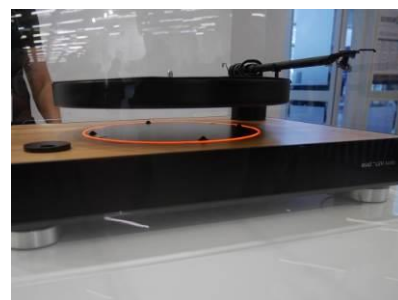
■ Reed

リムドライブとベルトドライブの切り替え式ターンテーブルで有名な同社は、今回不思議な動作をするトラッキングエラーレス・トーンアームを発表。

アーム後部にレーザー出力があり、ベースについているセンサーで角度を計測、常に0になるようにベースが円弧状に動く。トーンアームとベースのそれぞれの円弧状の動きを2つ組み合わせる事によりニアトラッキング的動作をさせる構造。 €50,000。



■MAG-LEV Audio 磁気フロート型ターンテーブル



ちょっと前に話題になった磁気フロートにより完全非接触で回転するプラッタを持つアナログターンテーブル。

アイディアとしては面白くビジュアルインパクトは大きい。しかし、基本的にプラッタとトーンアームがメカニカルグランドされておらず、磁気フロートしているプラッタに芯がないので回転しながら上下微動している。音質的には結構難しいのではないかと推察する。

■SME

比較的小さなブースだが、さすがに老舗のトーンアームメーカーで人気が高く、いつ行っても人が一杯。



トーンアームラインアップ

Model15: €7,950



Model30: €28,700



Model20: €11,200

Model10: €5,500

トーンアームのイメージが強い SME だが、中・高級クラスのターンテーブルも充実させてきている。

■Ortofon



例年同様に 1F 入り口近くの立地のいい場所でブースを構えていた。同社の赤白のロゴは遠くからでも大変目立ち、いつも人だかりが。Cadenza の上位機種 (MC Windfeld Ti) と SPU-Wood A (A シェル) を発表。

■Tech DAS

噂どおり、AirForce-ZERO がお目見え。西川社長自らのデモ。タンゲステンプラッタ+バキューム、盤面叩いてノイズの出方の違いを訴求。デモ中のためアップ写真撮れず。



■JICO (日本精密宝石工業)

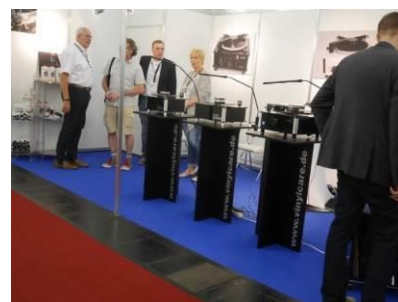
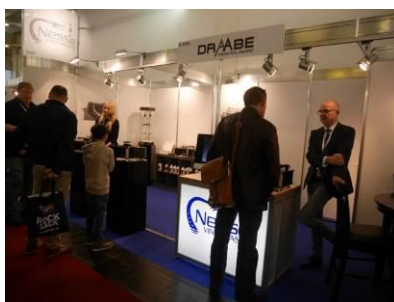
兵庫県にある互換針メーカー。一昨年に続き 2 度目の出展と思われる。仲川社長自ら陣頭指揮をされていた。既に主力商品群はサファイヤ、ルビー無垢針に移行しているとの事。

陶器ボディーの試作 MC カートリッジを展示デモ。カンチレバーは無垢ポロンで予想価格は 8 万円台とか？ 試聴室前では針の組立工程の実演も行われていた。



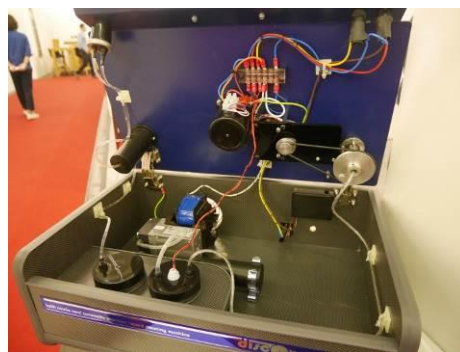
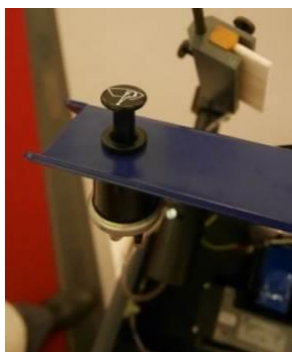
■レコードクリーナー

バキューム式クリーナーは Nessie/Hanru などに加え、clearaudio や Pro-Ject 等のアナログプレーヤーメーカーも参入。市場が出来つつある。



■Keith Monks

レコードクリーナーを作り続けているガレージメーカーで、社長の Keith Monks 氏は、海外のショーではいつも白衣で商品説明する有名人。新製品 disCoverry を展示。“今度のネタは何？”と聴いたら、“静かな事だ！”と左下写真のポーズ。中央写真のクリーナー液 SW は旧ミニクーパーのウォッシャーポンプ SW を流用。“まだサービスパーツで手に入る”との事。



■トーンアーム調整機器

オーバーハングやアジマスを調整する治具も多く存在する。ツールに頼ってきっちりと調整するのは如何にもドイツ人的気質。



Technics の現地販社メンバーも clearaudio 製の調整ツールを使用。

■レコード店

中古、新品含めて 5,6 店のレコード屋が参加。clearaudio もブース内で同社デモディスク、高音質ディスクなどを販売。どこも常ににぎわっていた。



右上の写真は、カナダのジャズシンガー Anne Bisson の即売サイン会。



その中でも特にいつもにぎわっている日本からの輸入中古レコード専門店。“日本＝高品質”を訴求。クラシック、Jazz、ROCK など幅広く扱う。昨年は“井上陽水”などもみかけたが、今年、邦楽は見当たらなかった。店主は年に数回日本に仕入れに来るらしい。

■オープンリール

今年の変化の一つがオープンリール。まだ大きな流れにはなっていないが、昨年より数は間違いなく増えている。上段の写真は録音済みテープを販売する業者。レコード同様に新作もリリースされている。また下段の写真の様に試聴室デモでオープンリールを使う人たちも増えた。

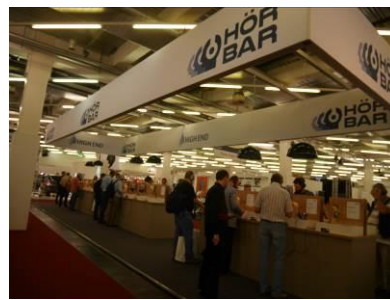


■ HörBar

昨年あたりからヘッドフォン展示が増え、市場の隆盛が見て取れる。

昨年同様に1階の一角に High End 事務局主催で各社ヘッドフォンの聞き比べ（シュートアウト）コーナーがあり、終始にぎわっていた。

Technics も T-700 を提供。



カップル

最終日は日曜日。ドイツでは商店が休みで他に行くところが少ない事もあり、家族連れやカップルでの来場者も多い。奥様方も結構興味深く見学・試聴しているのも特徴的で、日本の様に明らかに退屈そうな女性は見かけない。感覚的ではあるが昨年より女性の来場者が増えている気もする。



文化の違いがあるとは言え、国内のオーディオ関係のショーからすると羨ましい限りである。日本のオーディオショーも、もっと家族連れ・カップルが訪れやすい演出を考えなければならないと痛感した。

■最後に Technics ブース

昨年までと場所を変えて、Panasonic ブースの隣（昨年までは Pioneer のブースだった所）に移動。復活 3 年目で漸く認知度も上がり、昨年までであった、“あれ、いつのまに復活していたの？”といった質問を受ける事もなくなった。

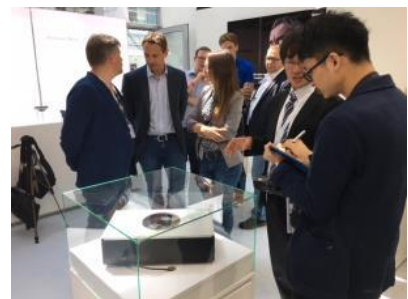


Panasonic と Technics が並んでブースを構えているので出展者としては何かと便利。その前はカフェテリアで広々としていい立地。正面ショーウィンドウは R1/1200G を展示し、入ってすぐ横に SL-1200 ラインアップを展示。多くの人が 1200 に興味を示されていた。



ブース中央に新製品の SC-C70 を展示し、SU-G30 の MQA 対応、新 G シリーズ 3 機種を訴求。

今年は、ここで、新製品の SC-C70 のお披露目があり、初日は欧州中心に多くのマスコミに来場いただき、説明員の我々是对応に追われていた。



Technics ブースの再奥部にしつらえた試聴室は、現地販売会社メンバーが中心に念入りにセッティング。今までと違ってナナメ配置で、R1 シリーズ+1200G と、G90/G700/1200GR の 2 システムを交代で聞かせていた。ソースはハイレゾ・アナログが半々で、主に、ロック、ポップス系がメイン。終日多くのお客様が試聴されていた。



■ 余談

毎年、Technics のブースには地元の熱心なファンが詰め掛けて来られ、そういった方達との会話も楽しみの一つである。

昨年は SL-1200 の復活に伴い、D.J.風の Technics T-シャツを着た方々が来訪。今年はちょっと流れが変わってビンテージ Hi-Fi マニアが。

右の写真は、ファンの方がわざわざ会場まで持ってきた、私物の Technics トーンアーム EPA-100。1975 年頃の商品。独自のダイナミックダンピング機構もリフターも生きていて非常にいい状態がキープされていた。

わざわざ我々に見せる為に、会場までカバンに入れて持って来てくださるファンの方の“Technics 愛”に感動を覚えた。



■ 著者プロフィール



1980 年松下電器産業(現パナソニック)株式会社入社。
CD プレーヤ、レーザーディスクプレーヤ、DVD プレーヤ、BD レコーダ等の商品開発を経て現職。

現職：パナソニック(株)、アプライアンス社、
ホームエンターテインメント事業部、
テクニクス事業推進室、CTO/チーフエンジニア。